

『地方小都市の魅力』

講師：土肥 博至(神戸芸術工科大学 学長)

コメンテーター：三好 庸隆(JIA 都市デザイン委員会副委員長)

【はじめに】

若い頃は、ニュータウンづくりばかりをやってきたが、一方で、この10年位、中小都市、地方都市をみてまわってきた。これを通じて、環境・都市・生活空間を作ることについての物の見方がわかってきた。それを教えてくれたのが、小さな都市であり、今日は、小さな町の話をも6都市を例にしていきたい。

【6都市の概要】

ここで挙げた6都市を選定した考え方は、全国で約3,300ある基礎自治体から

- 次の条件で地方都市を抽出し、
 - 都市計画を適用している(2,130自治体)
 - 大都市圏に含まれない(1,200自治体)
 - 人口10万人未満である(1,100自治体)
- さらに、次の条件で選定した
 - 伝建地区を除く(観光都市化を目指す都市を除く)
 - 市を除く(大きくなると個性的でなくなる)
 - 独自性が見られる都市
 - 多様なタイプを選ぶ

金山町(山形県最上郡 人口7.4千人、在郷町)

- 町並みづくり百年運動
- 町並み創造の目標(年間20戸を金山型住宅に建替え)を掲げた町並み保全

三春町(福島県田村郡 人口17千人、城下町)

- 保存・観光でなく普通の町の街並み再生
- 街道拡幅整備を契機に街並みづくり、中心地区の環境整備を時間をかけて実現

小布施町(長野県上高井郡 人口12千人、在郷産業町)

- 民間主導の環境整備
- 地域の豪商(子孫)の資産、屋敷、人脈を生かした中心地区整備

古川町(岐阜県吉城郡 人口16千人、在郷市場町)

- ナショナルトラストが始動した町づくり
- 敢えて伝建の道を選ばず住民の生活観を感じさせる街並み整備

八尾町(富山県婦負郡 人口22千人、在郷門前町)

- 祭りが支えた町づくり
- 厳密な保存に固執しない、2つの祭りの舞台にふさわしい街並み整備

宇和町(愛媛県東宇和郡 人口18千人、在郷商家町)

- 伝建指定を目指す街並み再生
- 伝建指定を目指して、個別建物等の点的整備から町の中心地区に絞った整備

【まとめ】

人口規模が小さく、意思疎通が図りやすく、合意形成が比較的容易といえる地方小都市でも、特色ある町づくりを実現している例はそれほど多くはなく、成功するにはそれなりの要因がある。

- その1つは、住民が町づくりの各場面を担いつつ、時間をかけて計画づくり、体制作りを行っている
- どこでも国や県の補助事業を巧みに利用している。特に、町づくり全体を考える機会をもたらしたHOPE計画の果たした役割は大きい。

このように、住民主体、コンパクトシティという側面は、これからの町づくりの参考になると考えている。大きな都市の一部にしてしまう市町村合併は、各都市のオリジナリティのある方法を失わせかねず、何を得て、何を失うかを考えるべきである。

【質疑】

整った街並みが残ったところで、異常な建物が混じっているケースも多い。このような建物を取り除くことをやった例をご存知か。

皆無であろう。ただ東北の小さな町で、小さな再開発事業を導入してクリアランスした例がある。現実的には、次の建替え時にこうしてほしいと要望するぐらいが関の山であろう。

市町村合併で小中学生まで含めた住民投票をしているような例もあるがどのようにお考えか。市町村といったランクづけのあるのが、合併促進に影響しているのではないか。

小学生云々は別として、多数決で決めることになるのであろうが、要は、何を得て、何を失うかを整理した上で、問題は何かを評価していくべきである。いきなり協議会のような議員レベルで方向性を決めて、説明会に入るような形は、効率は良いかもしれないが、あとになって後悔することも起こってしまうと思う。

町の活力を永續させるには、そこでの生活の実現、経済的基盤が重要と考えるが、そういう視点で、地方の商店街が廃れている中で、商店街を復興する方法があれば教え

ていただきたい。

小さな町の中心地区は、ある時期中心商店街であったことは間違いがないが、鉄道の発達等の影響に見られるごとく、商店街は、時代要請によって変わるものであり、現在まで続いている方が珍しい。昔の商店街は、毎日買い物に行くものでなく月に一度とか祭りの時とかに買い物に行くところであり、商店主も兼業していた。したがってあのようなかなり長い商店街が形成されたと思う。この商店街の形を復活させるの非現実的で、長さでいえば1/5~1/10で十分だと思う。一方、これから高齢化社会になって、街なかに商店街を残す必要性は感じており、街並み保存の面から言えば、時代の要請に合わせていかに集約できるかが課題と思う。

町並再生を考える場合、キィになる建物が残っており、ほとんどが老朽建物であったり、現代的な建物という状況の中で、過去の街並みを再生しようとするなかで、地域の素材を使った小粋な建物がある場合、伝統的な建物で統一し統一感を出したいと思う反面、このような小粋な建物の扱いに悩む面もある。これについてのお考えを。

町の魅力づくりでは、保存、再生がメインテーマではなく、独自性を感じさせることに価値がある。したがって、事例のなかには、新たに創造するとはっきりさせ、つくりかたの申し合わせをつくっているものがある。ただ、それが昔の作り方に近い基準としている例が多いが、これは、伝統的なもの、古いものがコンセンサスを取りやすいということと伝統技術の育成が背景にあるからである。ただ基本は、合意できるものであれば何でもよいと思う。

金山、小布施では、建築家が参画し、伝統技術や単なる見てくれではない本質的なものの理解に貢献しているが、建築家の役割についてのお考えは。

宇和町は、文化行政の流れの中で町並整備をしており、最も古いものにこだわってきた。そこでの話で、伝統的な設計をできる人がおらず、設計事務所に任せると紛い物になってしまうと残念がっていた。町並整備には、建築家も含めて、人材が見つからないのが課題である。

地方都市では、人口減少が一般的だと思うが、過疎が町づくりにどのように影響しているか。

人口減少で困った状況を感じて、それを契機に町のあり方を考えることになって、それをうまく捕まえられたかどうかで道が分かれてくることになるのであろうが、全般的には、過疎はマイナス要因となっているであろう。一方、人口が減らなくて、残った人だけでというよりは、大学等で都会に出て、何らかの理由で戻ってくる人は、非常にパワーをもって帰ってくる人が多く、この人たちがネットワークを組んでキーになっていることもある。このように広い視野で見れる人が、狭い範囲に係ることが大きな成果に繋がり、重要な役割を果たすことにもなるともいえる。

ニュータウンにタッチされていた時代から考えると、マクロには、都市に人口が集中し一定の安定期を経て減少傾向を示すようになった人口移動を考える場合、経済的要因が大きいと思うが、一方で人々の生き方が変わってきたのではとも感じる中で、地方都市の魅力が人を引き付けるようになってきたという面がありそうか。

全くお答えすることは出来ないと感じているが、生活像に対応した様々な生活の選択肢をできるだけ持つことが重要であると考えている。そのなかで小都市は1つの選択肢と考えられるし、都心回帰の傾向の中で郊外の人口減が進み課題として扱われているが、現在の都心回帰については、10年もつか疑問と感じており、郊外も選択肢の1つと位置付けるならば再生の手をつけるべきであろう。農山村もそのひとつになりうるかもしれないなかで、地方小都市は十分成りうると思われる。とにかくこのような複雑な対応関係を整理して、それぞれの魅力ある整備の方向を考える必要があると感じている。